

ひょうご 水百景

No.12-2 円山川（養父市養父市場）

～真鯉から錦鯉へ、養蚕業が衰退し錦鯉の里ピンチ～



写真-1 円山川に架かる米地橋（平成24年4月撮影）

■ 新緑をバックに米地橋をパシャ！

写真-1 は、「道の駅 やぶ」近くの円山川右岸堤防から一般県道 255 号・上村養父停車場線の米地橋（めいじばし）を撮ったもので、4 月下旬なので新緑がきれいです。米地橋は、橋長 120m、幅員は車道が 4.5m、張出歩道が 2.0m で、橋の下を円山川が滔々と流れています。

■ 鯉の養殖に一番大切なもの～水

鯉の養殖に一番大切なものは水、特に水温の管理が重要で、水温が年間を通じて 15℃以上の期間が長いほど有利だそうです。鯉は 10℃前後から餌を食べ始め、水温が上昇するにつれて摂餌量が増加し成長も早くなりますが、30℃以上になると摂餌量は低下します。

また、鯉の産卵活動が最も盛んなのは水温 19～23℃で季節は5～6月です（やはり5月は鯉の季節！）。

鯉の卵のふ化は水温が 15～30℃で可能ですが、20℃前後が最適といわれています。

錦鯉は水温の急激な変化に大変弱いので、特に水温管理に気をを使う必要があるそうです。

円山川中流部の水温は上記のような条件を概ね満足し、鯉の飼育に適していたと思われます。



写真-2 鑑賞池の錦鯉

■ 食用の真鯉から観賞用の錦鯉へ

錦鯉のはじまりは、江戸時代後期の文化・文政（1804～1830年）の頃、新潟県の二十村郷（現・小千谷市、長岡市の一部）で食用として飼育されていたマゴイに、突然変異で色のついた変わり鯉が現れたことがきっかけです。それから、より美しい色を作ろうと品種改良を重ね、現在、錦鯉の品種は100を超えていて、その唯一無二の色調や色彩の豊かさから「泳ぐ宝石」と呼ばれています。



図-1 養父市場周辺の地図

『ひょうご水百景』No.12-1の「鯉養殖の歴史」にあるとおり、養父市場では、観賞鯉^{※1}は昭和12（1937）、13（1938）年頃に新潟県から移入され、戦時中関心が薄れました（それどころではなかった）が昭和30（1955）年頃に復活し、本格的に鯉の増殖・改良が図られるようになりました。昭和40（1965）年頃からの錦鯉ブームに乗って錦鯉の養殖が盛んになり、養父市場は「錦鯉の里」といったキャッチコピーが定着しました。

平成12（2000）年春には、新品種「ひれ長鯉（羽衣ともいう）」も誕生しました。普通の錦鯉に比べて、尾ひれも背ひれもその長さが2倍以上です。

※1 観賞鯉：錦鯉の飼育は、19世紀に新潟県旧山古志村で始まったと一般的に考えられている。農民が、一部の鯉が他のものより明るい色をしているのに気づき、それを捕まえて育てたとされる。それ以降養殖は進み、20世紀までに数多くの模様が開発された。もっとも顕著なものは赤と白の「紅白」と呼ばれるものである。大正3（1914）年の東京博覧会に出品されて以降、錦鯉への関心は日本中に爆発的に広まった。以後新潟県では錦鯉の養殖が盛んになるが、平成16（2004）年10月23日に発生した新潟県中越地震により、旧山古志村芋川流域では842ヶ所で崩落が起き、52ヶ所で河道閉塞を生じるなど壊滅的な被害を受けた。錦鯉も養殖されていたが、地震により棚池の底にひび割れができて水が失われたり、棚堤防が決壊して流失したり、土砂崩れにより埋まったりするなどして約80%の錦鯉が死んだ。生産者らは生き残った錦鯉を救出し、ヘリコプターにて村外へ搬出した。

なお、「錦鯉」という名称は、昭和33（1958）年ごろに名付けられたもので、特に色彩の美しい観賞用のコイを総称する名前です。また、錦鯉の一般的に言われている寿命は30年ほどだとされています。

■ 養蚕業の衰退、では鯉の餌は？

大正から昭和初期の時代、蚕の繭から紡がれる生糸は、外貨を得るための重要な輸出品目でした。「繭を売ったお金で軍艦を買った」とまで言われた時代もあります。しかし、その後、太平洋戦争や化学繊維の台頭、安い海外の繭の流入などにより養蚕業は衰退の一途をたどり、かつて鯉の餌として蛹を供給してきた養蚕農家は養父市場から消えてしまいました。

現在、国内で流通している生系の9割以上が中国やブラジルからの輸入に依存しているそうです。では、鯉の餌はどうしているのでしょうか。現地で鯉の養殖をされているとおぼしき方に聴くと、魚粉・小麦粉・米ぬか油かす・大豆油かす・りん酸カルシウムなどを配合した飼料（ペレット）を使っているそうで、餌代が人並にかかるとか。

錦鯉ブームが去って以降は需要が落ち込んできており、錦鯉の養殖業はきびしい状況が続いています。現状では真鯉20%、錦鯉80%の比率で、大きいのは2貫500匁(1貫=3.75kg、貫の1000分の1が匁)を超えるというから9.4kg、1m以上の大物だそうです。これだけ大きいと、餌もかなりの量を食べるんでしょうねえ。

■ 円山川右岸道路沿いに錦鯉のモニュメント

平成4(1992)年頃、八鹿土木(現・養父土木)管内の国道312号や円山川右岸道路に「ひょうご緑の道しるべ」として11ヶ所で地域のシンボルをモチーフにしたモニュメントの設置や植栽、パーキング等の整備が行われました。

その一つに、養父市養父市場の一般県道104号物部養父線(円山川右岸道路:平成25年4月1日物部藪崎線に改称)沿いに「錦鯉」のモニュメントが設置されています。全長8m、胴の直径2m、実物のおよそ20倍の大きさです。

平成6(1994)年、八鹿土木事務所に出張した際、現地調査につきあっていただいたH所長が、この「錦鯉」のモニュメントを見て一言、「鯉は上流に向かって泳ぐもんや」。

それからしばらくして再び現地を通った時、錦鯉は向きを上流に変えていました。「鯉の滝登り※2」の故事に倣ったのでしょうか。確かに、流れに身を任せている鯉よりは、流れに抗って泳いでいる鯉の方が心情的には好感が持てますが…。

なお、「道の駅 やぶ」にも錦鯉のモニュメントがありますが、ここはほとんど“滝登り”状態です。



写真-3 物部藪崎線沿いの錦鯉モニュメント
(全県ひょうご1991年 通巻65号から引用)



写真-4 現在の錦鯉モニュメント

※2 鯉の滝登り: 中国の正史の一つ『後漢書』にある故事がその由来。

昔、黄河の中流に龍門という峡谷があり、激流で普通の魚は登ることができず、そこを登りきれた魚は霊力が宿り、変じて龍になると言われていた。この伝説になぞらえて、難関を突破して立身する事を「登龍門(龍門に登る)」と言うようになった。ちなみに龍は中国では皇帝の象徴とされている。

「鯉の滝登り」もこの故事が由来となっているが、『後漢書』には、「三秦記に曰く、河津、一名龍門、水險しく通ぜず、魚鼈(べつ)の属、能く上る莫し、江海の大魚龍門の下に薄(せま)り集うもの数千、上るを得ず、上らば則ち龍と為るなり」。つまり、龍門の凄まじい急流を、魚やすっぽんのたぐいは上る事ができず、川や海の大魚が龍門の下に数千匹も群がって来るが、上りされるものはない。もし上りきれたならば、その魚は変じて龍となる、とあり、「鯉」の字が一字も出てこないし、いかなる魚も龍門の急流を上ったとは書かれていない。

なお、龍門峡谷は、古代、治水に功績をあげて夏王朝を開いた禹(う)が切り開いたところ。



写真-5 「道の駅 やぶ」
“滝登り”状態の錦鯉のモニュメント

■ 「錦鯉」のブームが去って錦鯉の需要減、餌代の高騰、後継者難のトリプルパンチ！

平成 24 (2012) 年 4 月 28 日付けの某紙に、「金魚の町すくえ 奈良・大和郡山〜後継者難 200⇒60 軒」といった見出しの記事が載っていました。金魚ブームだった 1960 年代に養殖業を始めた人たちの後継者がいないため、大和郡山の金魚養殖業者数はかつての 1/3 以下になっているそうです。ブームが去って需要が減り、餌代が倍以上になって、「金魚では飯を食っていける見込みがない」とか。

養父市場の錦鯉養殖も同じような状況です。昭和 50 年代、目白御殿と呼ばれた田中角栄元首相の自宅庭には 200 尾もの錦鯉が泳いでいて、1 匹数百万円の鯉もいると騒がれ、いっとき日本の富裕層の間でも錦鯉がブームになりました。しかし、その後のオイルショックや、マンションなど住環境の欧米化などでブームは終息に向かい、海外での需要はあるものの、町内に 3 軒（見た限り）ある養鯉業者は、ほとんど開店休業の状態とか。需要の落ち込み、餌代の高騰などで養殖をしても利益につながらず、しかも後継者難…。飼っている以上は餌代がかかるので利益どころか赤字が増え続けるばかり、さあ、どうなるんでしょうかねえ。

■ 錦鯉ブーム、再燃か！

ところが近年、錦鯉ブームが再燃しつつあるようで、独特で優美な色彩を放ち、日本の伝統文化や美意識の象徴として米国、アジア、欧州を中心に海外で人気を集めています。中華圏では風水文化や端午の節句などから縁起の良い生き物として知られ、欧米圏やアジア圏でも定期的に品評会が開催されるほど、錦鯉の国際的な評価は高まっています。自宅の庭で「生きた宝石」とも呼ばれているニシキゴイを鑑賞することは、庶民からはちょっとイメージしにくい贅沢な趣味ですが、これが特に外国人の間で人気のようです。

農林水産省の「令和 6 年漁業・養殖業生産統計」によると、令和 6 (2024) 年の日本国内における錦鯉の販売尾数は、新潟県が約 107 万尾で全体の約 43% を占め、以下、岡山県、福岡県、広島県、埼玉県が続いていて兵庫県はそれ以下ということです。「錦鯉の里」はどうなるんでしょうかねえ。



写真-6 旧国道 9 号沿いの街並み

■ モノローグ

5 月は鯉の季節で、こいのぼりが 5 月の風を受けて勢いよく泳いでいる光景を見かけますが、5 月 15 日は『総合治水の日』でもあり、この日からの 1 週間 (5 月 15 日〜5 月 21 日) が「総合治水推進週間」です。

総合治水対策の意義・重要性に対する流域住民の理解と協力を求める働きかけを全国的に展開することにより、総合治水対策の推進を図るとして、平成 3 (1991) 年に建設省 (現・国土交通省) によって制定されました。

近年、地球温暖化に伴う気候変動に起因して集中豪雨が多発する中、流域に住む人々の命と暮らしを守るためには、従来のように「川の中」だけで治水を考えるのではなく、流域全体で防災力の向上を図っていく必要があります。このため、従来型の河川・下水道対策に加え、雨水を一時的に貯めて流出量を抑える「流域対策」、浸水被害が発生した場合でも被害を少しでも小さくする「減災対策」を組み合わせた「総合治水」の推進が重要になってきます。

兵庫県では、「総合治水」を柱とした「武庫川水系河川整備基本方針・整備計画」をすでに策定しており、現在、計画の具体化を図るべく現場においてさまざまな取り組みが進められていますが、これと並行して総合治水を全県的に展開していく取り組みが本格的にスタートしています。そのために必要な推進エンジンの役割を担う「総合治水条例」が、平成 24 (2012) 年 3 月 21 日に公布され、4 月 1 日から施行されています。

この条例は、「総合治水」に県民総意の下で取り組むことを宣言するとともに、県・市町・県民の責務・役割を明らかにして、総合治水対策を推進していくための法的根拠とするものです。総合治水課では、条例に係る施行規則の制定を終え、今後の運用の仕組みづくりに取り組んでいるそうです。

兵庫県の「総合治水」に関する取り組みは、全国的に見ても先進的なもので、それだけに大変だと思いますが、市町と連携をとりながらがんばってください。

【参考資料】

- 1 『兵庫史を歩く・完結編』 NHK神戸放送局姫路支局発行 平成4年7月
- 2 『錦鯉の囲い飼い』 養父市 HP 令和元年11月更新
https://www.city.yabu.hyogo.jp/kanko_ibento/rekishi/1_2/1896.html
- 3 『近畿川ものがたり：円山川が育てた砂防技術とニシキゴイ〜②「コイ作りは水作りから」』 ラジオ大阪 平成19年2月
<https://con-bat.sakura.ne.jp/michi-kawa/kawa06/0218/1.html>
- 4 『全建ひょうご・通巻65号』 兵庫県建設技術協会 平成3年
- 5 『世界の大富豪は日本のニシキゴイが大好き！ その実態は鑑賞か、投資か？』 マネセツ HP 令和元年6月
<https://manesetsu.jp/5568>
- 6 『但馬の百科事典〜但馬の養蚕』 公益財団法人 たんしん地域振興基金 <https://tanshin-kikin.jp/tajima/188>
- 7 『特集：川魚を知って好きになる！03〜年々人気上昇中！錦鯉の魅力』 農林水産省 HP 令和5年8月
https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2308/spe1_03.html
- 8 『大黄河 壺口瀑布』 平成19年10月
<https://www5b.biglobe.ne.jp/tanzawa/daikouga/daikouga.htm>
- 9 『コイ、ニシキゴイ、こいのぼり』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成24(2012)年8月 『ひょうご水百景』 No.12

改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』 No.12-2